音読

日本の名文23

参考①ウィキペディア
②鑑賞日本古典文学5

「伊勢物語」第六段

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経て、よばいわたりけるを、かろうじて盗みいでて、いと暗きに来けり。芥川という川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ、男に問いける。

ゆく先おおく、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、雷さえ、いといみじう鳴り、雨もいとう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓・胡籙を負いて、戸口に居り。

はや夜も明けなむと思いつつ居たりけるに、鬼、はや一口に食いてけり。

「あなや」と言いけれど、雷鳴るさわぎに、え聞かざりけり。

ようよう夜もあけゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けども、かいなし。

白玉か何ぞと人の問いしとき
露と答えて消えなましものを

「伊勢物語」平安初期に成立した歌物語。実在の歌人、在原業平（ありわらのなりひら）の歌を主にして創作された物語で、短いエピソード、百二十五段で構成されている。ほとんどの段が「昔、男ありけり」で始まり、主人公を業平と名指すことはない。

作者は不明である。

「伊勢物語」は、千年を経ても人気のある古典の一つだが、引用文を見ても、やっと恋を成就させ、逃げて行った先で女が鬼に食われて死ぬだけのストーリーで、近代の感覚では今一つ、盛り上がりがなく、どこが面白いのかさっぱりわからないという現代人がいても、不思議ではない。それに、感情移入の通路もつくられてはいない。

けれども、これを、和歌を中心とした詩文の一つとみなすと、どうだろう？

「白玉か何かでしょうか」という歌の中の女性の、幼い問いかけを後の悲惨な突然の死と合わせると、この文章が、悲しみの歌から創造の翼を広げて作り上げられた詩的幻想の産物だということがわかる。結末の空虚さと女の幼さ、男の一途さが、歌の中に溶け合い、一つの文学作品として成立している。

これを、宮廷文化を中心に築き上げられた「日本の情緒」の核と見なせば、読む人は、その悲しみの余韻に浸ることで、日本の伝統的な美意識に触れることができるだろう。

作品大意

昔、ある男がいた。自分のものにすることができなかった女を、何年もかかって求め続け、やっとのことで（女も心を寄せたので）駆け落ちし、とても暗い中を逃げてきたのであった。

芥川という川のほとりに連れくると、女が、草の上に降りている霜を見て、「あれは何？」などと、男に聞いた。行き先も遠く、夜も更けていた（ため答えることもできなかった）。（それに）鬼がいる所とも知らずに、雷まで激しくなっていて、雨もひどく降っていた。そこで、がらんとした倉の奥に女を押し入れて、（追っ手を迎え撃つため）男は弓や矢を入れるやなぐいを背負って、戸口に陣取った。

「早く夜が明けてほしい」と思いながらいると、（男が気づかぬ）その間に鬼が来て、女を一口で食べてしまった。

女は、「ああ～」と声を上げたが、ちょうど雷が鳴っていて、男は聞くことができなかったのだ。やっと夜が明け、倉の中を見ると、連れてきた女がいない。足ずりして、嘆き悲しんだが、いまさらどうにもできないのであった。

（そこで、一首詠んだ）草の上の白いものは、白玉かなにかでしょうか、と女がたずねたとき、露ですよと答えたが、そのときに露のように私も死んでしまえばよかったのに。

※原文では、この後、この話は二条の后のことで、男と駆け落ちしたが、追っ手の、后の兄らが来て、連れて帰ったというオチが付け加えられている。そのため、「鬼」が女を喰うというインパクトが弱められている。